

日本語要旨

Relazioni inaugurali

近代日本の文筆家、文具を抛ち自転車に乗る一都市空間にサドルにまたがって在ることの危うさ
榊敦子

本稿では、自転車乗りの練習経験を語る散文作品三篇――夏目漱石の「自転車日記」（1903年）、萩原朔太郎の「自転車日記」（1936年）、石川淳の「明月珠」（1946年）――の精読を通して、行動様式を異にする他人や危険な障害物の充滿する近代の都市ないし郊外の空間、高度な身体的能力を要するが乗りこなせれば行動の自由が広がる自転車という機械、そして人体の三者が絡み合いつつ保つ危うい均衡を浮き彫りにする。

ヴィクトリア朝末期、ロンドン在住の日本人男性、1930年代半ばの特定されない都市に住む男性、空襲の危険にさらされる東京に暮らす「無用の人」、それぞれによる一人称の語りに於いて、近代男性の主体が、身体的な困難、不測の邂逅、そして環境の浸透に脅かされる中で語り手の絶対的権威を失いつつも、「世界内存在」であるがゆえに可能な新たな視点を獲得することを明示したい。

吉原の文化をどう考えるか
田中優子

2024年3月26日から5月19日まで、東京藝術大学（国立）の美術館において「吉原展」が開催された。江戸の遊郭「吉原」をテーマにした初めての展覧会であった。鳥文斎栄之（ちょうぶんさいえいし）、喜多川歌麿、北尾政演などの浮世絵の名品を集め、吉原の街並みを会場に再現するなど、極めて上質の美術展となった。しかし国立大学での開催ということもあり、多くの批判があった。吉原は遊女つまり娼婦が働く場所であり、今日の社会において、その批判はもっともなものである。吉原の遊女は、書の修行をし、茶の湯、生け花、和歌、漢詩、香道の教養を身につけた女性たちだった。吉原芸者たちも、三味線、唄、踊りの、日本で最上の技能を持つ芸者であり、年中行事が盛んに行われ、吉原には上質の日本文化が作られた。そこから多くの文芸も生まれた。その事実と、遊女が家族のための借金を負って娼婦として働く存在であったことの、その両方の側面を、現代社会に暮らす我々はどう受け止めるべきか。今日まで続く性搾取である売春は世界全体でなくさねばならないのだが、それを肯定していた歴史とどう向き合うべきか問題提起し、共に考えたい。

Relazioni incluse nel presente volume

平安王朝物語文学に描かれた斎宮と恋愛の概念—伊勢物語、源氏物語と夜の寝覚
オードリー・サマンサ

斎宮は、平安時代の『伊勢物語』（9～10世紀）や『源氏物語』（1008年）、さらには『夜の寝覚』（1060～1080年）において重要な人物として描かれている。これらの登場人物は、斎宮の歴史的な重要性を反映しているだけでなく、物語の中で男女間に特有の関係性を表現するために特別な役割を果たしている。

斎宮が恋愛に関連するテーマと結びつけられて描かれているのは、歴史的かつ文学的な傾向を反映していると言える。実際、伝記的資料によると、斎宮はその奉仕期間が終了した後も出家することが稀であったとされている。故にむしろ、斎宮の共同体内で共有されていた男女関係の概念は肯定的なものであったことがうかがえる。

本稿では、斎宮の物語的描写に見られる恋愛観について考察する。特に、上記の物語に登場する斎宮と、これらのモデルと考えられる歴史上の皇族斎宮、すなわち、恬子内親王（910～954年）、徽子女王（929～985年）、および当子内親王（1001～1022年）について論じる。

聖なるポルノグラフィア—高橋睦郎の初期詩集における男性同性愛的表現をめぐって—
オッキオネーロ・エドアルド

本稿は、高橋睦郎の初期詩集『薔薇の木にせの恋人たち』（一九六四年）と『頌』（一九七一年）を研究対象とし、これらの作品における男性同性愛の表現の進化に主眼を置きながら、文体論的・批評的な分析を行うことを目的としている。初期における高橋睦郎の男性同性愛表現は、例えば『薔薇の木にせの恋人たち』では中性的な若者の同性愛的欲望が幼神信仰として描かれている。一方で『頌』では同性愛の理想の対象が、筋肉隆々たるヘラクレス的な男性像に取って代われ、男性同性愛の表現の対象が変わっており、1970年代の『薔薇族』などの雑誌に見られる潮流を先取りしている。さらに、『頌』では聖なるポルノグラフィアとHomo・Penisistus（もしくは男根崇拜者）に関わる理論が提示されている。高橋は精緻なレトリックによって猥雑さを昇華させ、宗教的寓意が彼らの出会いの場においていかに効果的であることを示している。

ガブリエーレ・ダンヌンツィオ著『死の勝利』の邦訳コーパスの構築と計量文体
論分析
カミッレーリ・ガブリエレ

本研究では、1913年から2010年にかけて出版されたガブリエーレ・ダンヌンツィオ著『死の勝利』の8種類の邦訳における文体の変遷を検証した。各翻訳はTEI-XMLに準拠したマークアップにより、地の文、主人公の台詞、ヒロインの台詞、内的独白、書簡の5つのサブコーパスに分けられた。22の文書レベルの特徴を変数とし、次元削減のため主成分分析を実施した。その後、階層クラスタリングおよび分散分析を用いて各クラスターの特徴を比較した。また、Zeta分析を用いて各サ

ブコーパスにおける有意なトライグラムを特定し、これらの相対頻度を基に上記の分析を行った。その結果、第二次世界大戦前後で翻訳に見られる文体的特徴の違いが明らかとなり、さらなる比較研究への基盤を提供している

明治期における近代日本語記述文法の発展 カルヴェッティ・パオロ

現代日本語文法の記述的研究は明治時代に始まり、教育的・規範的な目的で使用される書籍の出版は19世紀後半から20世紀初頭にかけて始まった。それまでは、日本語の「研究」の中心はいわゆる「古典語」の分析であり、同時代語の記述に対する必要性は感じられなかった。

本稿では、当時の日本語の文法書のごく一部を取り上げ、その記述の構成や主な用語・概念上の工夫を分析する。これらの文法書の中には、その後の日本語学の発展に影響を与えたものであり、今日で言うところの言語教育目的の応用言語学的な発想から生まれたものもあれば、記述文法（時には規範的な意図も含む）もある。

幸田露伴の初期作品における「風流」の文学的視点 グエリーニ・ブルーノ

日本における「風流」という美的概念は、古典期に導入されて以来、歴史を通じて幾度となく意味の変化を遂げてきた。明治時代の作家、幸田露伴(1867-1947)は、1888 年を皮切りに「風流」を自分の文学の枢要な要素の一つとし、「風流」が語りの大部分となるデビュー作の『露団々』(1889 年)や傑作の『風流仏』(1889 年)などの初期作品において主題として用い、この語の新たな意味を導いた。したがって、本稿では、この概念が露伴の作品に与えた影響と、多義的な意味変化を経たこの語の個人的解釈を分析する。さらに、露伴の作品における「風流」の重視が、1937 年の九鬼周造の論考に至るまで、「風流」という言葉の使用にどの程度新たな刺激を与えたかについても検討する。

古い伝統と多様な変化―室町時代から江戸時代における能楽の地方への広がり クロシェンコ・イヴァン

室町時代末期から江戸時代にかけて、「地方能」あるいは「民俗能」と呼ばれる五つの能が誕生した。それらは世阿弥元清のお能から離れ、中央の能五流のいづれにも属さず庄内地方、下越地方および佐渡島の農民、村人、町人たちによって数世紀にもわたって代々受け継がれ、やがてその地域の人々の文化を代表するものとなっていった。またこの伝統は今日においてもプロの能役者ではなく、現地の地域住民により今まで保存され、祭りの場で上演されている。確かに「地方能」の上演は一般的な能楽の演目とは異なるものの、古来の演劇的要素が残されており、非常に興味深いものとなっている。

本稿は、京都や江戸から地方へと能楽が広がっていった背景を探り、伝承や文献を通じて地方能がどのように誕生したのかを明らかにすることを目的としている。特に山形県に伝わる黒川能、山戸能、松山能および新潟県に伝わる大須戸能、佐渡能に焦点を当てて考察する。

終助詞「ね」「よ」「よね」と教育指導：発展に向けて
ストッキ・ジョルダーノ

本稿では、第二言語としての日本語における終助詞「ね」「よ」「よね」の習得に際して学習者が直面する課題を検討する。これらの終助詞は、自然なコミュニケーションを成立させるために欠かせない要素である。しかし、多くの教科書では十分に上げられず、限られた説明に留まっている。本研究では、日本および海外（特にイタリア）において使用されている複数の教科書を分析し、どういふふうに取り上げられているかを明らかにする。終助詞「ね」「よ」「よね」に関する先行研究およびメイナード（2002）の「Place of Negotiation」理論を踏まえ、これらの終助詞の認知的・感情的・相互行為的意味に基づく新しい教育的枠組みを提示する。

物語る「声」—夢野久作の『白髪小僧』論
ストリッポリ・ジュセッペ

夢野久作（本名杉山泰道、1889-1936）の作品をめぐる先行研究では、口承性が作者の根本的な特徴とされてきた。杉山家が黒田藩で果たしてきた御伽衆の役割、執筆作業中自作を友人や家族などに読み上げる習慣や、作者の能楽との密接な関係などの伝記的な情報から、作者の文体と口承芸能との共通点—リズムのある文章、擬態語擬音語と会話などが多用される文体—が窺われる。夢野が童話から執筆活動を始めたことから、夢野文学において口承性が中心的な要素になっていたことが認められる。いわゆる「童話の時代」（1919-1926）には、作者が『九州日報』に童話を数多く発表し、1922年に東京の出版社誠文堂から「長編童話」として『白髪小僧』を出版した。本作は、前衛的小説、『ドグラ・マグラ』（1935）に代表される二重人格というモチーフの先駆としてみなされてきた。本論では、夢野文学における口承性に着目し、本作における「声」がナラティブの運びに大きな効果を及ぼしていることを明らかにする。

キリシタン版ローマ字本における西洋外来語の形態統語的統合：文法書、辞書、
宗教書
ダントーニオ・コリーニ

本稿では、1591年からイエズス会によって印刷された文書（キリシタン版）における外来語の形態統語的統合の主要な方法について研究している。特に、ローマ字で書かれた日本語の文書を中心に考察を進めるものである。

まず、外来語の形態的な特徴が分析され、複数・単数や性区別といった母語の形態が保持されていることが指摘されている。次に、二つの形態統語的統合の方法が考察されている。一つは「たち」や「ら」などの接尾辞、および「ご」や「おん」といった接頭辞が外来語の名詞に付く場合である。もう一つは、外来語の形容詞が外来語または和語、漢語の名詞と組み合わせられる際に、日本語の語順の影響が認められる形態統語的統合である。

本研究の結果によると、これらの方法は印刷物が普及する以前、即ち手写本がイエズス会内で流通していた時期に翻訳過程で採用されたことを明らかにする。また、この言語方針は、分かち書きと同じく、イエズス会によって決定され、一貫して適用されていた可能性が高いことを指摘している。

『ガキ帝国』と『パッチギ!』における在日コリアンの表象
デ・アンジェリス・エウジェニオ

1980年代まで、在日コリアンを主人公にした映画は、在日コリアンのキャラクターを日本人と対立する形で定義し、彼らのアイデンティティを他者性として提示することが多かった。井筒和幸の『ガキ帝国』（1981）は、在日コリアンのキャラクターを、被害者的なステレオタイプや「他者」として描くことなく、その民族性を強調せずに描いている。井筒和幸は、初期作の要素を残しつつ、国内でヒットした『パッチギ!』（2005）では、異民族間の恋愛物語を通じて、日本人と民族的に対立する在日キャラクターを、より典型的な形で表現している。この二つの作品を比較分析することで、『ガキ帝国』は在日コリアンのアイデンティティの構築よりも、暴力的で多民族的な社会の描写に重きを置いており、『パッチギ!』は在日コリアンを日本人の視線にとっての「見世物」として描くことで、より融和的な視点を提供していると論じる。

1970年大阪万博におけるイタリア・ファッション展
ディミトリオ・ラウラ

本稿では、1970年大阪万博のイタリア館で開催された小規模なイタリア・ファッション展について考察する。この展覧会は、イタリアのファッションが日本で展示された最初の機会の一つであった。イタリア・ファッション協会（Camera Nazionale della Moda Italiana）の歴史的アーカイブに保存されている未発表の文書や写真のおかげで、展覧会の進展過程、そして少なくとも3つの異なる展示レイアウトがあったことを追跡することが可能となった。しかし、いくつかの組織的な問題により、この展覧会は日本での「メイド・イン・イタリア」を十分に体現することはできなかった。それでもなお、イタリアのファッションハウスや特にイタリアの公的機関が、これまで過小評価されていた日本市場の莫大な可能性に気づくきっかけとなった。一方、日本側ではすでに、イタリアのファッションはそのカラフルな生地や手頃な価格のプレタポルテ（既製服）で高く評価されていた。

現代日本詩における『短歌ブーム』現象
デージェンナーロ・ダミアーナ

日経新聞は最近、若い世代が自作の短歌をSNSで共有する「短歌ブーム」という現象について、いくつかの特集を組んできた。現代において、SNSはこの文学ジャンルが読まれ、書かれ、発表される方法にどのような役割を果たしているのだろうか。現代の短歌を大衆文化の表現の形として捉えることは可能であろうか。なぜ、フェミニズムやジェンダーに基づく暴力といったテーマが繰り返し取り上げられるのだろうか。本研究は、ジェンダー研究と「World Poetry」論の視点を通して、現代日本におけるこの現象についての理解の空白を埋めることを目的としている。

地下鉄のダイヤモンド：京都のドラッグから考察する現代日本社会のジェンダー・アイデンティティとジェンダー・ロールの分析
デルディン・マルコ

本稿は、初めて日本人によって企画されたドラッグ・ショーである京都メトロ「Diamonds Are Forever」(以下、ダイヤモンドナイト)の分析を通して、現代日本におけるドラッグという現象を考察するものである。まず、ドラッグ・クイーンという存在は定義付けを避ける存在であるとしながらも、本論考で著者はクイーンの特徴を「過剰さ」や「怪物性」こそがその特徴であると結論付ける。この怪物性は、ダイヤモンドナイトのクイーンのキャラクターのインスピレーションのみならず、不調和な動きや振る舞い、そして「怪物」的な身体のパフォーマンスにおいてもよく認められる。「怪物」としての存在であることは境界やカテゴリーについて問いかけ、自らを異なる、逸脱した道德観や感性を持つ「マイノリティー」の一部であると認識しているという面で、クイーンのアイデンティティ形成にも影響を与えている。そして、ドラッグとその「怪物性」は、ジェンダー・アイデンティティやジェンダー・ロールを問い直す機会を与え、自己認識に新たな視点をもたらしている。

戦後日本におけるイタリア映画文化の受容：ネオレアリズモとポスト・ネオレアリズモを巡る理論批評的考察
トーゾ・ジュリオ

1940年代末から1950年代前半にかけて、イタリア映画は日本では例外的に高い評価を受け、観客からも好評を博した。特に、イタリアから到着した最初のネオレアリズム映画は、日本の映画批評家たちに熱狂的に迎えられた。ロッセリーニ、デ・サンティス、デ・シーカといった監督たちの作品は、戦争で壊滅的な打撃を受けた国が変革の過程にある様子をリアルに描写する能力が称賛された。これらの作品は、より成熟し社会性を意識した日本映画のモデルとなり得ると見なされた。その後数年間、イタリア映画は、日本の映画専門誌で最も評価され、議論され、分析される外国映画のひとつとしての地位を確立した。

本稿の目的は、戦後日本におけるイタリア映画文化の主な受容様式を、資料の分析と当時の映画専門誌やその他の出版物の閲覧によって明らかにすることである。批評的受容、理論への影響、および両国の映画文化のあいだに生まれたいくつかの出会いの事例についても論じる。

日本語学習における翻訳とトランスランゲージング：イタリアでの新たな研究視点
バガーノ・アレッシンドロ

グローバル化により、今日の社会はますます多言語化している。その結果、言語教育においても多言語主義に対応し、異文化間コミュニケーションを促進する必要が高まってきている。本研究はアメリカ合衆国で行われた日本語教育に関する研究を基に、効果的な異文化コミュニケーションを目指す言語教育において、翻訳とトランスランゲージングが重要な役割を果たしていることを示している。また、コミュニケーション、翻訳、トランスランゲージングを統合したダイナミックな教授法が、学生の言語的・文化的多様性に対する意識を高め、異なる文化的環境で形成される新たな感性や主体性を育むことが強調されている。本研究の示

唆するところは、イタリアにおける異文化志向の日本語教育において、翻訳とトランスランゲージングの適用をより広範に分析探求する必要性である。

理想的な同盟国。ファシスト・イタリアとナチス・ドイツにおける日本のイメージの比較要素
バッソーニ・ニコラ

日独伊三国同盟に関する最近の研究は、軍事同盟の起源と機能において、文化的関係や同盟国のイメージ構築が重要な役割を果たしたことを強調している。しかし、これまで比較アプローチは、あまり重視されてこなかった。本稿ではファシスト・イタリアとナチス・ドイツにおける日本のイメージの比較分析の基盤を築くことを目的とし、日本に関する政治的言説が両国において発展してきた歴史的・制度的・知的背景について検討する。また、ドイツとイタリアの日本との関係の違い、両国における日本研究と文化政策機関の発展、1940年から1942年にかけてドイツとイタリアと日本のプロパガンダによって流布された日本についての政治的言説を比較分析する。

大正時代の作家たちと浮世絵版画
ファップレッティ・エレナ

江戸時代を通じて大量生産されてきた浮世絵版画は、明治時代になると次第にその価値を失っていった。しかし大正時代に入ってから、銀行員で登山家の小島島水（1873-1948）、詩人で文芸評論家の野口米次郎（1875-1947）、著名な小説家の永井荷風（1879-1959）といった先駆者たちが、日本における重要な芸術の一つとして浮世絵に関心を示し始めた。本稿では、海外のジャパニズムの影響や大正時代における江戸文化の商品化ブームを考慮に入れながら、江戸時代の美術に対する彼らの異なるアプローチを紹介し、こうした知識人たちが浮世絵について執筆するに至った動機を明らかにする。

「和食ってどんな味？うま味と日本の味の『ガストロポリティクス』」
ファリーナ・フェリーチェ

本研究では、「五味」の一つとして知られるうま味が、日本の食文化や国民的アイデンティティの形成にどのような役割を果たしているかを考察する。食とアイデンティティの関連性は広く認識されており、国民食の伝統を確立し、保護し、発信する「ガストロポリティクス（美食政治）」の台頭からも明らかになっているように、政治的にも重要な意義を有している。特に日本では、2013年に和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたことが、ガストロポリティクスの象徴とされ、他国でも同様の方針が見られる。しかし、日本の場合、食材や調理法、作法、象徴的な意味だけでなく、和食そのものがもつ特別な味を定義するに至っている点が特徴的である。このような背景のもと、うま味は単なる味覚の一つを超えて、和食の文化的シンボルとしての意味を持つようになっている。本研究は、うま味の歴史的変遷をたどり、日本の「ガストロポリティクス」におけるナショナリズム的な視点から、その役割と利用を考察する。

ヴィンチェンツォ・ラグーザ (1841-1927) の日本陶磁器コレクション
ブドリス・アグニエシュカ

本稿は、ローマ文明博物館所蔵のヴィンチェンツォ・ラグーザ・コレクションに含まれる日本陶磁器についての予備的研究である。イタリア人彫刻家であるラグーザ (1841-1927) は、1876年から1882年まで日本に滞在し、帰国後は教育目的で600点以上の陶磁器を収集した。コレクションには、有田焼、鍋島焼、九谷焼、京焼をはじめ、六古窯の伝統的な炝器など、江戸時代から明治時代に作られた多様な作品が含まれる。これらは単に輸出用ではなく、日本国内向けの貴重な作例も多数存在する。

本調査により、これまで知られていなかったラグーザ・コレクションの学術的価値が明らかになった。他の欧州の日本美術コレクションとは異なり、教育のために収集されたことにその特徴を見出せる。本コレクションは、19世紀における日本とイタリアの文化的交流を伝える貴重な資料として意義深い。

明治日本におけるイタリア公使館と領事館の歴史と役割について
ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ

本研究は、イタリア側・日本側の未公刊史料の分析を通して、十分に知られていない幕末・明治初期の日本（横浜、東京）における最初のイタリア公使館・領事館となった建造物の歴史について明らかにするものである。本稿で取り上げられるイタリア公使館・領事館として利用された建造物は主に横浜の外国人居留地の90番地にあった建物、のちに横浜の弁天、フランス公使館の近くにあった建物、そして東京の功運寺および虎ノ門・裏霞が関に存在していた複数の建物である。これらの建造物の所在地、外観および建築上の特徴について論じることによって、明治維新前後の日本におけるイタリアの立場と活動をより深く理解することができるだろう。

ロンドンにおける日本の「正しい姿」とは？ 現代日本の広報文化外交に
おける戦略的ナラティブ
マリーニ・ラッファエーラ

1950年代から、日本は国際社会の発展に貢献する平和的で民主的な国家としてのイメージを打ち出してきた。しかし、最近のアジア太平洋地域における安全保障上の緊張により、このイメージは複雑化し、日本の外務省は広報文化外交および戦略的対外発信の強化を迫られている。その戦略の中心に位置するのが、サンパウロ、ロサンゼルス、ロンドンに設立されたジャパン・ハウスである。これらは、国際社会における日本の「正しい姿」への深い理解と共感を広げることがを目的としている。本論文では、国際パブリック・リレーションズ、パブリック・ディプロマシー、メディア研究、そして博物館学の観点から、ロンドンのジャパン・ハウスを予備的に分析する。特に、施設内で行われる展示やイベントの企画に関わる全ての人の相互作用を通じて、日本の「正しい姿」というコンセプトがどのように戦略的ナラティブとして形成されているのかに焦点を当てている。

歌舞伎における女性劇作の登場：長谷川時雨・岡田八千代・木村富子の作品分析
マリンチョーニ・ルドヴィカ

本稿では、明治末期から昭和初期にかけての歌舞伎における女性劇作家の台頭とその意義を検討する。具体的には、長谷川時雨の『桜吹雪』、岡田八千代の『黄楊の櫛』、木村富子の『玉菊』という3作品に焦点を当て、これらの女性劇作家が歌舞伎を単なる芸術表現の場としてだけでなく、性別役割や女性の自律性などの社会的課題に取り組む手段としてどのように活用したのかを考察する。革新的な語りの技法や女性主人公の描写を通じて、これらの作品は伝統的な舞台上の女性像に挑戦し、新たな表現の可能性を切り開いた。本稿では、これらの劇作家たちが伝統的な枠組みを超えることに成功したのか、それとも既存の形式の制約に留まったのかについて検討し、しばしば彼女たちを特定のジャンルに分類するために用いられる用語の妥当性についても批判的に論じる。

サッカーの資本主義的再象徴化：Jリーグの事例に着目して
ラズグイ・ヨーズリ

本論文は、日本プロサッカーの歴史的および社会文化的発展を考察し、Jリーグ創設を通じた資本主義的再象徴化のプロセスに焦点を当てる。まず、アマチュア時代から1990年代のプロ化に至る日本スポーツの進化を辿ることから始めたい。そして、構造的な「消費者型ファン」と、欧州のパフォーマンス伝統に触発された反構造的な「ウルTRAS」を対比することで、新自由主義的価値観がどのようにファンの行動に影響を与えたかを分析する。ヴィッセル神戸の事例を通じて、スポーツの商業化における世界的な傾向を反映したり、時に先取りしたりしながら、いかに日本のプロサッカーが高度な資本主義的枠組みの中で誕生したのかを論じる。

人気、破壊的、ステレオタイプ：1990年から1999年までの日本のマンガにおける
クィア表現分析

リステー・カーミル・ヴァレーリオ

過去十年、英語圏学界では日本の漫画・アニメがフェミニストやクィアの視点から分析され、日本文化に固有の歴史的・社会的要素が明らかにされてきた。本論文では、クィア批評の重要性と、一方でこの分野に関するイタリアの学術研究の欠如を考慮し、日本におけるクィア性の変化を述べる。欧米の理論的研究と国内研究を比較し、社会的・国際的な要因がLGBTQ+コミュニティの美学、表現、物語に及ぼした影響を探る。なお、1990年代の三作品、CLAMP『Wish』（1995-1998）、村上真紀『グラビテーション』（1996-2002）、春野菜々恵『ダブルハウス』（1996-1997）を検討対象とする。